
チート転生者の人生日記

たくあん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チート転生者の人生日記

【Nコード】

N0960Z

【作者名】

たくあん

【あらすじ】

ある大富豪の家へ盗みに入った盗賊団「タナトス」のリーダー「リード・サナク」。大富豪の家へ入った瞬間謎の怪物にリードは殺されてしまう。別の世界へ飛ばされたリードは何を見るのか・・・

第一章「転生？」

「……時間だぞ」

全身を黒い服で覆い、真つ黒なマスクをかぶった男が始まりを告げる。

「……ああ、今日のターゲットは大物だ。油断するなよ」

こうして盗賊団「タナトス」のリーダーであるこの俺リード・サナクの運命を大きく変える事件が始まる。

チート転生者の人生日記第一章「転生？」

時刻は12時を過ぎ、辺りは真つ暗。まさに盗み時だ。

リード「おいガリア、……分ってるな？」

ガリアと呼ばれた男は、リードの側近のようなものであり、最も信頼できる仲間だった。

ガリア「ああ。どうせこの家以外にも金を大量に隠してる場所なんざいくらかもあんだろ。根こそぎ奪ってやろうぜ！」

リード「ああ！」

そして俺たちは突入した。そこが悪魔の屋敷だとも知らずに……

ガリア「ぐおお!？」

屋敷に突入した途端、ガリアが悲鳴を上げた。ガリアを見ると、体中が切り刻まれている。

リード「ガリア!」

ふと後ろに気配を感じた。急いで振り向くとそこには・・・

「なんだこれ・・・怪物？」

間違えても人間とはいいがたい生き物がそこに立っていた。怪物は俺を軽々と持ち上げ、ガリアと同じように切り刻む。

リード（クソ・・・こんなの聞いてねえぞ・・・俺・・・こんなトコで死ぬのか・・・？）

???「悔しいか？あの怪物に復讐がしたいか・・・？」

リード「!？」

気がつくとも真つ暗な場所にいた。そして目の前にはさっきのとは違う怪物がいる。

リード「お前・・・何者だ!」

???「YESか、NOか」

リード「っ!？」

あの怪物から何か言葉に出来ないものが伝わってくる。例えとす
るならば・・・恐怖。

リード「そんなもん・・・決まってるだろうが！」

そのとき、あの怪物が少し笑った気がした。

リード「YESだ」

???「よく言った」

怪物が指を鳴らす。すると世界が回転を始めた。

???「貴様を今から転生させてやろう・・・特別な力を添えてな」

リード「転生？」

???「まず貴様には別の世界に飛んでもらう。そこで力をつけ、
またこの世界に返ってくるがよい・・・」

リード「な!?!?・・・ちょっと待て!」

???「さあ行くがよい・・・魔法の世界、ガルディアへ・・・」

リード「うわああああ!」

そこで意識が途切れた。だが、どうやら俺はまたとないチャンスと
手に入れたらしい。上等だ。魔法の世界だろうがなんだろうが行っ
てやる。そして・・・必ずガリアの仇をとってやる。

第二章「さあ、ゲームの始まりだ」

リード「やつとだ・・・」

あの変な怪物に転生させられ、早10年。俺はこの世界ガルディアに新たな生命として生まれた。だが生まれたての俺を待っていたのは暖かい歓迎ではなく厳しい現実だった。

ヤツのミスその1。どうやらあの怪物が俺に与えた「特別な力」はガルディアでは軽蔑されるもののようで、俺の10年間は散々なものになった。

ヤツのミスその2。俺の性別が女になっている。もうミスじゃなくてあいつわざとやったんじゃないかと思うくらい見事に女になっていた。

だがヤツが与えた力のおかげで今日まで生きてこれたのも事実だ。俺の自己治癒能力や、筋力、そしてこの世界特有の「魔力」もこの世界の住人とはかけ離れていた。もちろんいい意味で。

俺はこの10年間、元の世界の常識を俺の頭の奥に押し込み、この世界の常識を叩き込んだ。今では魔法も使えるようになった。つまり俺は最強になったわけだ。だが問題もある。

まずは年齢。まだ10歳の俺は、かなり体が小さい。これでは何かと不便も多い。

次に見た目だ。この世界では青い目はありがたいものとされる。聖職者は大体青だ。逆に赤は軽蔑の対象になる。赤は魔物や魔族など、人間の敵の目に多い。ちなみに俺の目の色は赤だ。

この世界は人間と魔族が主な住人とされている。魔族といっても人間のように知的な行動を取れる魔物を魔族と呼んでいるだけで、実際は人間と魔物なのだが。

俺はこの世界に生まれたときから10歳になったら旅に出ると決めていた。なぜ10歳なのかというと・・・まあ、キリがいいから。

そして俺はついに旅に出る。

「さてと・・・そろそろ行くか」

旅に出るといっても持っているものは肩にかけるバックだけだ。金など持っていないし、食べ物なら現地調達できるからだ。

「まずはバハムートだな」

この世界は魔法の世界というだけあって、ちゃんと召喚獣が存在する。太古の昔、大きな戦争があり、そのとき活躍した召喚獣が眠った地に町や国が作られた。町や国の名前はその召喚獣から取られている。

「おっと、帽子を忘れるところだった」

この帽子で目元を隠さないとともに行動が出来ない。ほんとに不便だ。

「さあ、ゲームの始まりだ」

俺は静かに家を出た。

第三章「一気に決めるか！」

リード「うん。いい天気だ」

俺は今バハムートへの道のりを歩いている。バハムートへはあまり遠くないはずだが、10歳の歩幅は結構小さく、まあまあ時間がかかる。

リード「・・・思ってたより遠いな」

いきなり弱音を吐き、苦笑い。

リード「しかし・・・バハムートに着いたとして、ギルドが俺を雇ってくれるかどうか」

それはもう運に任せるしかない。そんなことを言っていると、何か気配を感じた。

リード（これは・・・魔物か？）

そう思いながら後ろを振り向くと、比較的名な魔物、アンデットがいた。冒険者などが魔物に殺されそのまま放置すると、その死体に怨念が集まって立派なアンデットの出来上がり、というわけだ。

リード「アンデットか。魔法を使うまでもない、一気に決めるか！」

そういつてリードが取り出したのはナイフよりは長いというぐらいの小さな剣だった。だがリードにとってこれくらいのものであれば十分すぎるほどだった。

アンデット「アア・アア・」

リード「まともにしゃべれねえんなら無理すんな!」

そっいいながら剣を横薙ぎに振り、アンデットを真っ二つにする。

リード「やっぱこんなんじやたりねえな」

剣をバックに入れ、またバハムートに向けて歩き出す。リードがバハムートに着いたのはお昼時だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0960z/>

チート転生者の人生日記

2011年12月3日19時00分発行